

旅 は 人
旅 は 人 生

久良岐乳児院

長谷川 正弘

私の好きな散歩道

住むと言って良いか… 然程家さほどに居ませんが、私の住む東京都武蔵野市吉祥寺は、比較的近く 歩いて行ける距離に幾つかの川や池がありますし、其処には武蔵野の自然が戻ってきつつもある風景があります。

因みに、先日久々に正月でもあり武蔵関公園むさしせきに立ち寄らず、東伏見稻荷へ行ってみました。立ち寄らずとは、いつもの散歩コースとしては、目的地武蔵関公園うらなりひょうたんの末成り瓢箪型の富士見池の周りを概ね8の字に(ほぼ中央に橋がある)一周して行とは違う道で帰る処の関公園の往路の入り口 早大グランド側の裏口(表口は西武新宿線『武蔵関駅』方向に開いた入り口がそうであろうと勝手に思っている)を見つつ、この遊歩道の起点である石神井川沿いの両岸に新しく改修なった遊歩道の日差しがあつて暖かい北側(南側の遊歩道は、河岸丘の下にあり日差しが無く寒い感じ…)の方へ左折(川の遊歩道の北域には早稲田大学野球部野球場や合宿所…ハンカチ王子こと齋藤佑二選手の居た頃は人だかりしていた・馬術部総合棟等のある所)、遊歩道を川沿いのぼりに上り 終点の東伏見稻荷を目指しました。途中、川に洲のある個所があり、水もきれいでクレンソなどが生い茂った豊かな環境に、色々な鳥も夫々の佇まいたたずまいで語らっているかの様に見えました。関公園の富士見池から此の石神井川の遊歩道の中程までの辺り一帯はカワセミがオレンジ色の腹と光の具合で美しく光沢のある翡翠色ひすい 時には深緑色や藍色や瑠璃色にも見える羽を見せつつ(カワセミやシャボン玉の様な虹色に輝く色の仕組みを構造色と云うとか…要するに羽毛が青色・緑色なのではなく、羽毛の繊維の構造が太陽の光を受けて諸々の色に見えるのである。漢字表記で

は翡翠と書き、ヒスイと呼ばれた時代もあるとか。)キラッと飛び発ち、川面や池に差し出された様な枝(関公園の富士見池では砲列を並べて待ち構えるカメラマンたちが良いポジションで絵になる様にと形の良い枝を人為的に差し出しているのがあります。石神井川沿いには河川内立ち入り禁止でもあり川面迄の深さもあるので、必然的に遊歩道から川面の被写体迄の距離があり、池の畔ほとりからの撮影より上空から撮る感じでの難しさがあるので、そこまでの人出はないのです。其れに、遊歩道は人の流れる所、日がな一日三脚立ててと云う場所ではないのです。しかし、池の畔でただ待つ人たちに、こっちに来ているよと伝えてみたい気がするのです、知っているとは思いますが…)や排水管の引っ張り等に泊まるとは、水中の小虫・小魚を探し、狙い定めて水中に飛び込んで長いくちばし(因みに、今は無き JR 西日本山陽新幹線 500 系のノーズデザインはカワセミの嘴をモチーフにしたと云われています)で獲物を仕留める姿が見られますが、時に泊まる物が無いとホバリング(=滞空飛行)して狙い定めることもあるようです。この日も盛んに飛び回っては枝等に泊まり、獲物に狙い定めて仕留める姿が繰り返して見られ、コロナ禍を忘れる美しく元気な光景に出会えました。他に、白い鷺(調べてみると白い鷺にも種類の違いがあるらしいが違いが解らないから名前も特定できない)・ササゴイ(或いはゴイサギかアオサギ)・カルガモ・カイツブリ等が、暖かい日差しの中、縄張りを主張したり、のんびり餌を探したり、他の雄を追いつつ雌のお尻を追いかけている或る雄の姿が見られ、春も近いか…?と感じたりしました。白い鷺が川の兩岸に建つ高さのある建物の屋根の上にスーッと立って獲物か仲間を見張っているのか、ただの日向ぼっこか…、羽を乾かしているのか…、建物の1つは教会で十字架と被る様にその白い鷺の一羽が姿良く立っていて恰好良く 絵になっていました。カルガモが何羽も一斉に流線形にとんがった尻尾とお尻を天に突き出して逆立ち状態で水中の食物を採っている姿が面白く見られ大変ユーモラスであり和みました。散歩中ではありながら、立ち止まってそれ等を飽くまで眺

め、緊急事態宣言が出ると云う日に関わらず「あ～、良い正月」と思えたりして、70 数年の間で正月嫌いの私わたしがこんな感覚で居られるのは初めてかも知れないとも感じられました。しかし中には、立ち止まる我々につられて「うん、何だ…」と立ち止まろうとする御主人に「ウォーキングってのはねえ…」と、耳を引っ張られかねない勢いで先を促されていて、勿体ない折角ののどか長閑な光景のひと時をただサッサカ歩くだけなの…と思いもしました。何せ歩く会ですからそのような歩き方もしていなかったとは言いませんが、歩き方も色々できると良いんじゃないですかね。目的も途中でバードウォッチングに切り換わり、東伏見稲荷での分散初詣は極々簡単に、誰も居ない平時を知っていたので、参詣者が少ない割りに密を感じ長居はせず帰路に就きました。其れに既に、近所の武蔵野八幡宮とその隣の真言宗豊山派の安養寺、更に井の頭の池の天台宗の井の頭弁財天、何れも正月 5 日には(29 日から三が日まではいつも通り久良岐に居ましたから)此れまた例年通りに初詣のはしごは済ませてありましたし…、散歩の目的地として此处を選んだに過ぎないのでから。

さてそれは兎も角、決して近くはない…の声も聞こえますが、石神井公園しゃくじい(吉祥寺駅前より西武バス利用で案外時間が掛かる)を除いて、前述の様に実際総て家から歩いて何度も(最近、月に一回は行っている所も何箇所かあるほどで…)行っています。多摩川へは少し距離がありますが(JR 武蔵境駅これまさのりかえ、西武是政線=最近が多摩川線と云うらしい、で約 15 分 終着是政駅下車)前職の職場からは走って 20 分程で旧巨人軍多摩川グランドにつく距離にあり極めて身近な存在でした。もっと身近なのは玉川上水や千川上水・神田上水・仙川・野川・善福寺川・妙正寺川・石神井川等が徒歩圏にあり、その源には井の頭公園の『お茶の水』と呼ばれる湧水池に始まる井の頭の池・前述のせき関公園の富士見池・善福寺公園の善福寺池・小金井公園北にある湧水池と隣接する小金井 CC 内にある湧水池が石神井川源流で途中石神

井公園の三宝寺池に流れ込み更に滝野川を通して好田川に流れ込む等が
残って在るのです。

東京には川がないとは言われますが、東京西部には江戸時代からの人工
の川も含め中小の河川があり多摩川上流から取水したり、湧水池からの流
れを継承しつつ、多摩川下流に排水したり、江戸の町に流れ込ませたりして
いたのです。武蔵野台地は湧水が其処此処に池を形成していたようで、湖
と呼ばれるような港のある大きな池もあったようです。時代と共に、地下水
の汲み上げ量も増加し工業化・宅地化の進展等近代化・現代化の中、湧水・地
下水の貯水量が激減し池や湿地も減ったようです。葦あし又はヨシよしそして萱かやの
茂る武蔵野台地は最早や存在しないに等しいのですがしかし、地形的に武
蔵野台地は残り、水を抜かれた湿地は干上がり耕作地に生まれ変わり、池は
規模を縮小して人工的な池として改修・更新されて、いくつか残ったのが、
上記の池なのです。

因みに、私わたし中学生になる前後の頃、武蔵境から久我山(京王井の頭線の
駅としては三鷹台駅、住所は久我山)に引っ越し、対岸の三鷹台に住む友人
との思い出の中を探ってみたら井の頭公園の池も神田川が流れ出す、現在
の東園ひがしえんの辺りは湿地帯であり京王井の頭線の井の頭公園駅で渋谷方向に
向いて左下を眺めた一帯は葦又はヨシそして萱かやが生い茂り、葦に隠れて鮒
釣りをした覚えがあります。何故葦に隠れるかと云えば、園丁えんていさんが見回り
に来るのを恐れたからであり、園丁さんに見つかることごとく叱られると
聞いていたからです。最近さいきんは園丁さんは居らず、池の中央辺りの七井橋を渡
ったところに交番が来ていますが、園丁さんの活躍とは仕事が違う様で
今や此処等辺の池は全て釣り禁止となり、従って釣りをする人も居なくなり
ましたが(こころ辺りの川や池で、鯉ヘルペスが流行り一斉に釣り禁止とな
った様な…)、一方、例え釣りをして居たとしても咎められそうにも無い時代
になりました。バラバラ死体遺棄事件も解決していないし…、花見の酔客の

喧嘩の仲裁とか…、日常は暇そう…だし、市民警察官のサービスとしては園内案内も兼ねているのかも…。想えば確かにわずか 70 年程の間にも随分、周辺の自然風景も変わったと言えると思います、ですからその前の時代・更に戦前・大正・明治・江戸…と遡れば風景・風土もかなり変わっていて不思議はないでしょう。因みに現在の東京の水源・水路は小河内ダムから多摩川と利根川から荒川への水は武蔵水路により繋がっていて、更に狭山丘陵の多摩湖(=村山貯水池)・狭山湖(=山口貯水池)に貯められ其処から配水するシステムになっているようで、利根川や荒川そして多摩川の流れも、昔のように木材流通のためと云うより発電の他は水としてのみ(生活用水・農業用水・工業用水)使われているらしい。この事だけでも、河川の清浄化に役立っているのでは…と思うのですが。

上水とは人工の川であり、水運のため(=運河)・生活用水・農業用水として河から人工的に水を引く為に作った川を云うとのことです。最近では上水道も地下に埋められたりしているが、下水道が排水・汚水を流す川で匂いや衛生上の問題などもあり地下化していった訳ですが、上水道の地下化は川によって分断傾向にある地域を一体化するという大きな目的があったと思う(橋のない川…)が、其れ以外防災を考える時代になって、川沿いにグラウンドや野球場・公園など作り、其の地下に大きな溜池を建設し川に繋げ、通常は空であるが大雨時になると 洪水する前に其処に急増する雨水を貯められる様な仕掛けになっていたりするのです。例えば私の知っている児童養護施設のグラウンドの地下にも近所の川の氾濫に備えて、大雨時に溢れる雨水を貯めるためのプールが設置されているようで、これも地域に開かれた福祉施設を目指す一環と云う事になるのだと思っています。それと、川を暗渠にすることで、その上の土地が遊歩道や道路などに転用できるという考え方もあったと思います。また、分断されていた地域がひとつにまとまるといったメリットもありますね。実際、私の実家の近くにも現在の家の近くにも、

《水道道路》と呼ばれる道があります。戦時中は軍用道路であった様な…、まっ何処も軍用道路だったと思いますが…。《井の頭通り》と別称される此の道、吉祥寺から東の明大前辺りまではずっと真っ直ぐな車道でその地下に水道本管が走り明大前辺りで甲州街道に並行して淀橋(現在都庁の在る西新宿一帯にはかなり広い淀橋浄水場が在った)方向に向かって居り、一時代前は此処を東京駅からの武蔵境駅行きのバスが(トレーラーのバスなどもあって…)走っていました。其処(明大辺り)からその道路の起点の渋谷区宇田川町までは、その地下に水道管は通っていないようでギリギリ上下2車線の狭い車道になっています。吉祥寺から西は車の通れない幅広い赤土と雑草の埃多き道でしたが、現在では更に武蔵境北部関前5丁目(五日市街道との接点)まで延伸され立派な車道の《井の頭通り》に成っていて、武蔵境北部関前5丁目から多摩湖までは延々主に遊歩道(サイクリング・ロード兼)として続いています。要するに前述の荒川から武蔵水道経由で江戸川に入った水は水道本管で狭山湖・多摩湖に送られ、その水が此処を通過して都心に送られているのです。考えてみれば他にも水道道と呼ばれる、比較的直線の今時には少し狭めの多摩川からの道が存在するのを思い出しました。そしてまた一方現代の東京には一度見学してみたい、首都圏外郭放水路なる立派な防災設備としての巨大プールが地下に存在しているようです。これらの地下化は技術の進歩と送水管等の工事用資材の強度的進歩と現代化により、繰り返し更新され、頻繁な重量のある車の往来に耐えられ・しかも高圧・断続的高振動にも耐え得る様な水道管や道路構造が考案されていったものと理解しています。

しかし古代にも…、時としてスパイ映画に使われたトルコ(トルコは東洋と西洋の接点に位置し、また東西冷戦時代には東と西の諜報活動が交錯していたとか…)の地下宮殿(バシリカ・シスタン)とはこの様なものを指す訳ですが、トルコの其れは、地下貯水池と考えるべきものであります。因みに、映画

『007 ロシアより愛をこめて』のシーンの中にこの地下宮殿を退避路としてボートで脱出する場面があったのが最初で、この映画のヒット以後観光地として整備されたとのこと。つまり生活用水を貯めた巨大な地下プールで、東ローマ帝国時代のユスティニアヌス帝時代の遺跡であり現代まで自然に地下貯水槽と水路として継承されて保存されて改修されて来た世界遺産のひとつなのです。トルコと云う国はギリシア・ローマ時代の遺跡だらけなのであって、因みに其の地下宮殿やブルーモスクやアヤソフィア、トプカプ宮殿、ドルマバフチェ宮殿、スレーマニエ・モスク、スルタンアフメド・モスク、グラントバザールなどの在るイスタンブールの街は京都のように、特に歴史地域としてまとめて世界遺産になっているのです。

さて、昔話？（嘗てトルコには行ったことがあるので…）は兎も角として、自分でも何故かよく解からないのですが、心静まる川の普通に流れる音や海岸線の波打ち際の繰り返す普段の波の音（所謂α波？）が好きです。川や沢・海辺の流れや波の音が聞こえる宿に泊まるのも好きです。更に、川の流れる音を聴きつつ川に沿って歩く又は海岸沿いに歩くのも好きでした。そして、^{らく}楽が好きで人間なので、^{のぼり}上りより下りが気分的に好きです。つまり川下りですから上流から ^{わか}解れば源流から河口まで歩くことに達成感が感じられて、好きで遣っていました。従って、これまでに近隣の多くの川縁を歩いて下ってきました。無論一日で済むことも稀にありますが、多くは山登りが原点で、既に期せずして源流迄 ^{けいさわのぼり}軽沢登りと云う形や ^{けいとぎん}軽登山と云う形で極めた次が川下りとなったとも云えます。奥多摩の山々を一通り歩いた後に、小河内ダムサイトから多摩川を下りました。逆の場合もあり、良く散歩で歩いている川沿いの道だから、その源流から通して歩きたいと思って実行した事もあります。但し、酒匂川を除き神奈川の河川は源流から河口まで地形的に概ね一日で踏破できることも知りました。（関係ない話かもですが、俯瞰的に見た神奈川の海岸線歩きでは当然凹凸の激しい神奈川は三浦半島を川崎から

鎌倉まで凸凹もなぞって一周するのは3回に分けて行い、湯河原の県境千歳川河口から鎌倉までも2回に分けて歩きました…。)

奥多摩・奥秩父・大菩薩嶺の山々から集まった水は小河内ダムの奥多摩湖に溜まり、そこから多摩川の本流となります。更に陣馬山方向からの南北浅川からも、また三頭山を頂点に秋川溪谷方向からも多摩川へ流れ込みます。もう一本東京都には大きな川の流れがありますが、多摩辺りに住む人々にはあまり身近でない秩父北部を源に東京北部をグルッと周り込んで南下する日本最大の川幅を持つ荒川とか荒川放水路とその支流である墨田川他の運河、渡良瀬川水系と利根川水系で水運のため人工部分の多い江戸川が江戸と云うか東京の東端^{かす}を掠めるが如く在るのです。しかし、前述の通り多摩地域に住む我々には割と遠い存在の川であり、御承知の通り東京都は東西に長い地方自治体であって、西に住む住人にとっては東の下町方向は意外と遠い存在なので、水上バスに乗ったりすることは相当観光気分であり、その観^{みかた}方も申し訳ないが他人事^{ひとごと}なのです。

東京西部在住と云う事はまず多摩川です。多摩川は奥多摩からの林業を支えた流通の川でもありました。切り出した木材を筏に組んで流すのです。恐らく水深が浅^{あさいせい}い所為もあったと思われ水運には向かなかったのでしょう。そして玉川上水や神田上水は江戸時代その多摩川の水を江戸市民の生活用水に供するため引いた人工の川であります(上流部分は一部流通にも使われていたとの事…)。何故、荒川や江戸川から生活用水を引かなかったかは定かでないですが、鎌倉時代以前からの物流のための河川ではあった事は以前『鎌倉』の処でも書きました。之によってすっかり力を得て、その名を地域名に残したのは足立区の足立氏(藤原北家嫡流)です。夫々の川の水深に因る流れの速さに因るのか、川によって役割が違っていたのではないかについては不明ですが、調べてみる価値はあると思います、しかし今は暇

がないのです。そして前述の通り、現在は河川を流通に利用する事は無いに等しくなっています…。因みに、荒川についても調べると面白そうです。利根川東遷事業や 17 年の歳月を要した荒川放水路の工事など、人が河を制し利用しようとした歴史が其処にありそうです。

さて、^それ^たた川の話はこれくらいにして、川下りの話に戻りましょう。私の云う川下りとは、ラフティングではなく、先に書いた様に川に沿って川の流れを聴きつつ歩いて下る事であります。因みに、東京では多摩川・玉川上水・神田上水・千川上水・野川・仙川などを時には家族と歩いて、時には自転車で一人、時には一人で歩いて、時には山岳部のトレーニングを兼ねて皆と…何度も下ったことがあり、神奈川県では以前何処かで記事にした様に、相模川・鶴見川・境川等を下った経験があります。最近の^{かわべり}川縁の主要部分には遊歩道やサイクリングロードが設けられ、^{あずまや}東屋やベンチなども設置されて整備されています。其れに情報としてインターネット等で『鶴見川源流』『境川源流』等と検索すると、何と動画まで出てきてビックルします。

私が其処を歩いた時代は 20 年以上前の事であり、東京の川^{くだり}下りに子どもたちと行っていた頃は其の頃より更に遙か昔の事であり、インターネットで検索しても出て来ないテーマではあったと思うのですが…。其れに動画を見ると「俺が行ったのは此処なの？」と思う様であり、かなり整備され公園化していたりするの^は鶴見川源流の泉などで気が付きます。其れに私はその泉の先、更に上流まで行き其処からスタートした記憶がありますし…。

私が行った頃は、もっと特定し難かったり、看板も小さな手書きであったりして冒険感が強かったな^あと思い出すわけです。思い出すと言っても実は思い出せない、全部を覚えていないわけでもないし、既に昔の事なのであります。其れに、台風や地震などで水脈が変わることもあるし、変化していて当たり前なのかも…とも納得するのです。特に境川等確かに山ではあったが、動画にある様に、こんなに山深かったかな^あと感じますが、撮り方によるか

も知らないし…等と勝手に納得してみる今の私です。久良岐に勤め出し一人で歩いている時期は、神奈川県下の川下りや海岸線歩きをやったものです、横浜や神奈川県を足で知るために…。

川沿いに川を下ると云う事も、実は簡単ではないのです。前述のように、川に沿って遊歩道やサイクリングロードが整備されている区間は兎も角、川によっては遊歩道の整備も無く近くに道と云えるものもなく(山道でも・獣道でもあればいいのですが…)、大通りもかなり離れていたりすると、サバイバルになります。本当は其れも楽しみの内なのですが、道の無い所を歩くのが嫌いな人にとっては、其れは当然大変な事だとは思いますが…がしかし道なき道に行くのは大変面白い事なのです。河原のある所は河原を歩き、断崖絶壁の様な所は壁上部の縁の歩ける所を歩き、出来得る限り川から離れないようにして歩きました。

一寸余談であります、嘗て遥か以前の若い時代、中央線沿線を吉祥寺駅から浅川駅(現在の高尾駅)まで歩いたこともありましたが、此の時は多摩川に行く手を阻まれました。法的に鉄道軌道敷内と鉄道の橋つまりデッキガーダー橋は基本鉄道と其の関係者以外立ち入り禁止ですが、必ずしも一般道路と並行とは限らず、直近の一般道の橋を探し大回りして人や車の通れる橋を渡り、また延々線路に戻る…をして必要以上に距離と時間が掛かってしまったのを覚えています。因みに、中央線は東中野辺りから立川まではほぼ直線的に東から西へ進むのですが、立川から先南西方向に日野・豊田を経由して急角度に南下するのです。この間に玉川在り、上流は多摩大橋下流には立日橋があるが立日橋のほうが近いがコの字に線路に戻ったとしても3km強かかってしまうのです。その時は多摩川を越えるのに要したロスタイムを埋めるため、映画『スタンドバイミー』の一シーンの様に最後の八王子近くの浅川を渡るデッキガーダー橋はキョソキョソしつつも、ほかに道も

無く時刻表も確認の上で運行間隔の長かった其の頃、遂に一気に駆け渡りました。危険な違法行為でしたが若かったです…、しかし映画を見て真似したわけではありません、映画の方が後だったと思いますから…、ですが、そういう問題ではないですね…。

鉄道はそれでも、保守・点検・管理のための側道が概ね設けられていたり、一般道に沿ったりしていますが、川沿いには必ずしも道があるとは言えない事もあり、半分サバイバルなのです。

また、井の頭の池から流れる神田川(=神田上水)は隅田川に流れ込むのですが、その河口は兩岸共にギリギリまで会社の敷地であり、倉庫の様なものも衝立のように立ちはだかっていた記憶があり、河口まで沿って歩ける状態になく、神田川の水が隅田川に流れ込む様子がみられず残念な記憶があります。流れ込んで混じり合う様子を見るのも好きなのですが…。

そんな中で、比較的最近の事もあって(20年近く前、神奈川の川歩きの後)、相模川(=馬入川)下りは強烈に、しかし断片的に覚えている。吉祥寺駅初発の高尾行に乗り終点高尾駅で大月行初発鈍行に乗り換え、一駅で相模湖駅下車。12月～2月頃の事で、朝6時少し前ではまだ真っ暗く、相模湖駅前には除雪された雪が積まれていて、^{なみさくら}猶更寒さを感じた。^{ほぼ}略12時間の行程と想定し相模湖から平塚の海を目指し6時に歩き始めた。頼りは私の勘と相模川の流れのみ、地図は山でもないので持たない事にする、荷物になるから…、いざとなれば山と違って聞けば済む事…とは言っても迷い込めば人っ子一人いない場所も…、其れにこうした勝手に好きでしている事で他人の時間を取るのには性に合わないのである。津久井湖をクリアするまで河口に向かって左岸辺りを進む事にする、考えている暇はない。左岸は川面に対し高い位置に在って地図上では途中途切れている様であったが行って見なければ解からない、従って決めた以上は進む。途中確かに道ではなくなった、が獣道か人道か薄っすらと草が踏まれた跡があった。右手には落葉した樹々の枝を鳴らして吹き上げて来る風越しに聞こえる流れる水の音が冷た

そう…だったが、しかし私は既に汗をかき始めている状態でもあった。何せまだ暗い早朝、後ろから闇に追われるが如く走るが如く歩いていましたから…。津久井湖を出た流れは相模川となり南東に下り始め、猿ヶ島辺りから太平洋に向かってほぼ真っ直ぐ南下し始める。特に津久井湖=城山ダムから相模川の河原に至るルートや猿ヶ島辺りのコースについては何処を如何歩いたのか…。城山ダムサイトの記憶がない、とするとその手前の大井橋を渡ったのか、相模川に入る所辺りからの記憶がない。現在では首都圏中央連絡自動車道路(所謂圏央道)と並走する感じだが自動車専用道路では歩けない。今改めて地図上、何処を歩いたのかと確認してみると、確認できない事に気が付いた。本当に川沿いを通る道が無い、恐らくは微かな記憶の中に河原や河川敷を歩いたり、流れのすぐ側にある一車線の細道 市町村道等も歩いた様である。それでも、川さえ見失わなければ河口には出られると信じて下った。道を探していると時間が無駄になるので、それこそ勘と棒でも投げてみる感じで、迷わず即決 川から離れず、離れても必ず戻るを原則にただただ河口を目指して歩く。途中支流から流れ込む箇所もあり、そこが障害となるのは常である。矢張り相模川に出る辺りで時間を食い、厚木の辺りが昼、歩きながら何を食べたのか思い出せないがフワッと舞う風花を見ながら、八朗先生にメールか電話をした事は憶えている。(中略) 途中のどの辺りか相模川に出た辺りからか、河口に対して右側を歩く様になっていて、河口までこのまま進む事になる。明るいうちに河口につきたいと欲が出る。暗くなると矢張り道の見当をつけ難くなるし、折角の景色が見えにくくなる。『ひらつかタマ三郎漁港』を迂回し、愈々河口と思っただが、『トラスコ湘南大橋』を潜れるかと思っただがそうでもなく(この辺りまだ工事中であった)、チョッと右往左往して一山越すような感じで、西湘バイパス 国道 143 号線に取り付き、大橋に最も近い横断歩道を渡る。かなり疲れきっている足には、此の横断歩道意外と長い距離に感じた。渡り切ってジグザグに 143 号を下りきり、川沿いの道を二つ目の『ひらつかタマ三郎漁港』を目指す、とはその

前も書いたが実は、当時は唯の『平塚漁港』ではなかったかと記憶している。河口到着 17 時 30 分と記憶している、予定通り。先が見えれば走ってでも予定に合うよう調整はする。夕暮れ迫る海、ゆっくりと達成感に浸るべきなのであろうが、私はいつもそうだ、此の時も到着を確信し納得すれば、踵かかとを返して帰路についた。山って頂上が目的地ではあるが、其処で終わるわけではなく、下山して帰營・帰宅するまでがすべてであり、頂上での長居はかえって危険を伴う(天候の急変…頂上付近での天候急変は道を誤る確率が特に高い等の他、休み過ぎは体が動かなくなったり…)。こうした習慣が平地歩きでも生きているようだった。

今思う後悔の一つは、この様に作文を書かせて頂ける機会が与えられる事が起こるのであったなら、行動中もっとメモを執る習慣が在ったら良かったと云う残念な想いです。『書く』を投稿した際、記事にしなかったが、実は記録的なメモの取り方は不得意で記録できないのです。其れに、歩きながら書くとか歩いたり登ったりしている時に立ち止まって時計を見て記録すると云う様な作業は苦手だったのです。